

——書評—— 昭和農業技術史への証言 第3集

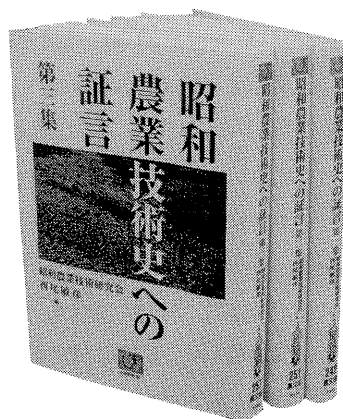
昭和農業技術研究会・西尾敏彦 編

シリーズ第3集目の本書は前2冊と同様、「昭和農業技術研究会」の講話記録をもとに編集されている。この研究会はこれまでに40回の会合を重ねており、本書にはそれらの中から作物の品種改良に関わる3題と土壌肥料分野の2題が収められている。書名を一見すると難解な専門書のように感じられるかもしれないが、全体が語り口調なので読みやすく、内容もかなり刺激的である。いずれの講話にも戦後の恵まれない研究条件下で情熱やチャレンジ精神をもって問題解決に向けた奮闘振りや予期せぬ失敗談などが語られており読み始めたら一気に読み進んでしまう。各講話後の質疑応答もなかなか興味深い。

第1話は伊藤隆二氏のプレゼンテーション。イネの大敵であるいもち病の抵抗性品種、「クサブエ」の育成にまつわる「天国と地獄」の物語である。第2話は北海道における稲作の栽培と品種の変遷についての岡部四郎氏の講話で、これまでの耐寒性の品種育成を振り返りつつ今後の展開方向を新たな視点から論じている。第3話は私自身もその一人である「いも仲間」の長老、坂井健吉氏の痛快ともいえるパフォーマンス。坂井氏は高澱粉、多収のサツマイモ品種、「コガネセンガン」の育成者で、この大モノかつロングセラーの品種誕生にまつわる成功物語を率直かつ大胆に披露している。苦労をはるかに越える氏のバイタリティには改めて脱帽する。第4話は江川友治氏の土壌学研究の講話。戦争末期から戦後の劣悪な研究環境を克服する

数々の工夫と努力の跡がひしひしと伝わってくる。最後の講話はわが国における土壌微生物学の先駆者、高井康雄氏が提供されている。この分野の草創期の孤軍奮闘振りがくまなく紹介されていて興味深い。本書に収められている5つの話題はそれぞれ独立した読み物になっており、どれから読み始めても面白く読み進める。全体を読み通してみると、できるだけ多様な視点から裏打ちされた証言が得られるように、また、読者の理解が深まるように、それぞれの対象分野、地域、時期、接近法、補注などがマトリックス状に配置されているなど、編者の細かい配慮が感じられる。劇的に変貌しつつある農業、そして飽食の時代に生きていると、ややもすれば食糧難時代に農作物の安定・多収を目指して貢献された諸先輩の業績を見逃しがちである。本書を読み進むと当時の社会的な背景とともに研究者の使命感や情熱が生き生きと伝わってくる。

(小林 仁)



(農文協 定価 2,100円)